

「自己－他者－自己」との対話により自己を見つめ直す道德授業の実践 －「手品師」の事例による対話を中心とした学習過程を通して－

Teaching Practices of Moral Education for Self-Reflection by Having Conversations with Other Persons and with Myself:
Through Learning Process Focused on the Conversations in the Case, “a Magician”

中山 裕之*
NAKAYAMA Hiroyuki

要約：平成 30 年度からの道德の教科化が決定し、考え、議論する道德授業が重要視され、多様な道德的価値観にふれあう中で自己を見つめ直すことができる道德授業が求められている。そこで、本研究では、資料「手品師」を用い、小学校第 6 学年道德、内容項目「正直・誠実」の実践を事例にして、「自己－他者－自己」という対話を用いた学習過程によって、多様な道德的価値観にふれ、自己を見つめ直すことができる授業づくりに取り組んだ。その結果、「自己－他者－自己」との対話を用いた学習過程は、多様な道德的価値観にふれ、道德的価値観について自己を見つめ直すために有効であることが明らかになった。

キーワード：道德の教科化 自己との対話 他者との対話 道德ノート
道德の授業におけるアクティブ・ラーニング

I はじめに

平成 26 年 10 月 21 日に、中教審から「道德に係る教育課程の改善等について」の答申が出された。その中で、道德を「特別の教科 道德」（仮称）として位置付け、道德教育の改善・充実を図ることが提言された。道德の教科化、つまり「道德科」の誕生である。日本の教育の歴史の中で非常に大きな出来事であるといえる。

教科化が提言された背景には、現在行われている道德教育に十分な教育的効果が得られていないことが挙げられる。それは例えば、資料に出てくる登場人物の心情理解にとどまるような形式的な授業であったり、当たり前としてわかりきったことを考える授業であったりと、児童生徒自身が道德的な課題にしっかりと向き合って考えることがあまりできていなかったからではないかと考える。

道德教育が十分に教育的効果を上げるためには、これからの道德の授業は、これまで課題として挙げられてきた、「心情理解にとどまったり、わかりきったことを考えたりする授業」や「道德的価値観を教え、道德的価値の理解にとどまる授業」から、「他者と学び合い、自分とのかかわりで道德的価値観を育む授業」が求められるのではないかと考える。

その具現化のためには、他者との学び合いのなかで、多様な道德的価値観にふれあい、異なる考えや道德的価値観を肯定的に受け入れ、自己を更新し、自分の生き方を見つめていくことが求められている。つまり自己をも含んだ他者や資料といった道德的事象との「対話」を通して、道德的価値観を育むことである。

以上のことをふまえ、教科化に向けた、新しい道德授業の在り方を探っていくために本実践を行った。

* 教育人間科学部附属小学校

Ⅱ 研究の目的

本研究の目的は以下の2点にある。

第一は、教科化に向けた、考え・議論する道徳授業の在り方を考え、「自己との対話」、「他者との対話」といった「対話」により自己を見つめ直す道徳授業の在り方を探っていく。

第二は、道徳ノートを活用することにより、「自己－他者－自己」という「対話」を通して、学習の中で考えたことを自分なりにまとめ、その時間の中で自己を見つめ直すための一助となることや、学習の履歴の積み重ねによって、児童自身が成長を実感でき、道徳科の評価につなげることができるかを検討する。

Ⅲ 研究の方法

(1) 調査対象 山梨大学教育人間科学部附属小学校6年生35名

(2) 調査時期 平成27年6月27日(土)

(3) 調査方法

調査は、道徳における内容項目〈正直・誠実〉を資料「手品師」を用いて、「自己との対話」・「他者との対話」・「資料との対話」といった「対話」を取り入れた学習過程、並びに、道徳ノートを用いた研究授業を行い、授業後、道徳ノートの記述や、授業中の話し合い、行動観察の様子などから、一つの考えや道徳的価値観に固執するのではなく、自分と同じ考えや道徳的価値観だけではなく、自分と異なる考えや道徳的価値観に出会い、考えを深めることで、自分を見つめ直す学びがつけられていたかどうかを検討する。

「対話」によって自己を見つめ直す学びをつくるための手だてとして、「対話」にかかわるものを3つ、道徳ノートの関わるもの1つ、計4つの工夫を行った。

【対話に関わる工夫】

「対話」(自己・他者)を通して、自分がこれまで生きてきたなかで培った道徳的価値観と、資料や他者との対話を通して出会った道徳的価値観との相違を肯定的に受け止めることが大切と考え、そこから道徳的实践力を育てたいと考えている。

そうすることで、資料や道徳的事象に個として向き合うだけでなく、資料や道徳的事象から、〈自己との対話－他者との対話－自己との対話〉という他者とのかわりのある学びの過程を通して、自分とは違う道徳的価値観に出会ったときにも受容的・肯定的に受け入れることができる姿勢を育て、自己を見つめ直すことができると考えている。

① 自己との対話(資料・道徳的事象との出会い・資料の事前提示・事前に感想を記述)

資料は、前日のフロンティアタイム(学年・学級の裁量時間)に読み、気になったことや考えてみたいこと、疑問に思ったこと、共感できることなどを道徳ノートに記入しておく(なぜ・どうして、わかるかわる、いいね、その他)。それは、資料にじっくりと時間をかけて向き合い、自分の考えや思いをもち、資料を読んでから少し時間を置くことで、授業までに個々の中での思いを膨らませることができたり、本時において話し合いの時間を十分に確保するためであったりするのではないかと考えるからである。(資料との対話・自己との対話)

また、資料への導入、価値への導入といったこれまで道徳の授業で一般的に行われてきた「導入」をあえて行わず、事前に道徳ノートに書いた、気になったことや考えてみたいこと、疑問に思ったことを出し合い、学習問題を児童とともに作る。そうすることで、「考えてみたい」という気持ちを

もって主体的に授業と向かい合えるようにした。(自己との対話)(道徳におけるアクティブ・ラーニング)

次の学習過程である「他者との対話」を行うにあたり、児童が主体的に学ぶためには、道徳ノートに記入したことから学習問題を設定することが有効であると考ええる。(道徳におけるアクティブ・ラーニング)

②他者との対話(ホワイトボードの利用・グループでの対話・全体での対話)

学習問題を設定し、学習問題について個の考えをもった後には、まず全体の場において異なる考えの数人が発表し、複数の考えを取り上げる。そうすることで、多様な考え方があることを感じるきっかけになる。

そして、グループで自分の考えを出し合う活動を行う。ここでは、自分の意見を言うだけでなく友だちの意見をしっかりと聞くことや、質問や意見をどんどんすること、友だちの話を聞いて、考えが変わってもよいことを確認する。また、図1で示したように、ホワイトボードにネームプレートとペンでグループの中に出た考えを整理し、可視化する。

次に、グループで出た考えを全体で発表する。ホワイトボードに書かれたグループ内での様々な意見交換の様子を全体で発表することで多様な考えにふれ、自己を見つめ直すきっかけになる。

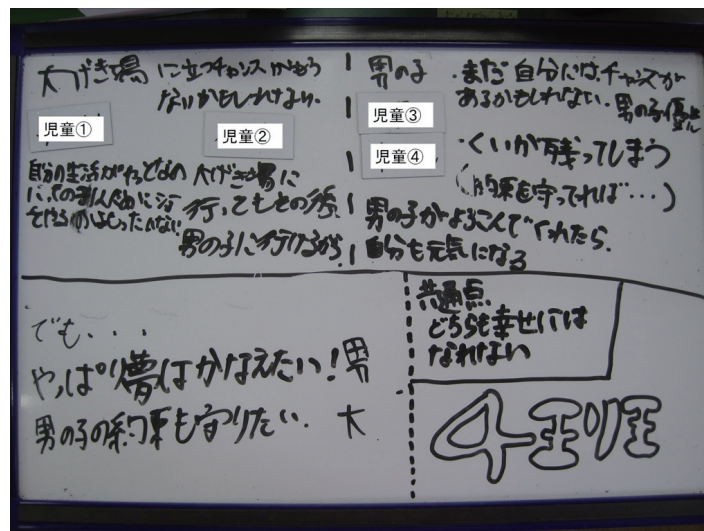


図1 グループでの話し合いに使用したホワイトボード

③自己との対話(道徳ノートにまとめる・考えの更新, 再構築)

最後に、本時を通して考えてきたことを道徳ノートにまとめる。そうすることで、自己を整理し、本時の学習内容についての道徳的価値の理解が深められたことが実感できることが、自己を見つめ直すことにつながる。

【道徳ノートに関わる工夫】

これまで道徳の授業においては、ワークシートなどを使う授業が多く見られてきた。ワークシートを使う利点もいくつかあり、有効な方法のひとつである。

本研究では、道徳ノートを用いて実践を行う。ワークシートとは違い、自分の考えを自分なりに表現し、デザインしてノートを「つくる」ことができると考える。道徳ノートを用いることにより有効な点は以下の通りである。

- ①毎時間道徳ノートを用いることで、学習の履歴が残り、振り返ってみたときに自分の成長を実感したり、改めて考え直したりすることができること。
- ②友だちの考えや自分の考えを書いたり、絵や言葉を使ったりして、自分なりにノートを「デザイン」することで、学びを深めるためのツールになること。
- ③学びの履歴を残すことで、教科化に向けて、通知表などに記入することになる、評価のための資料となること。

といったことである。

図2～図5に示すとおり、これまでも実践を行ってきた。発達段階に応じて道徳ノートの使用は有効である。

＜今年度の実践＞

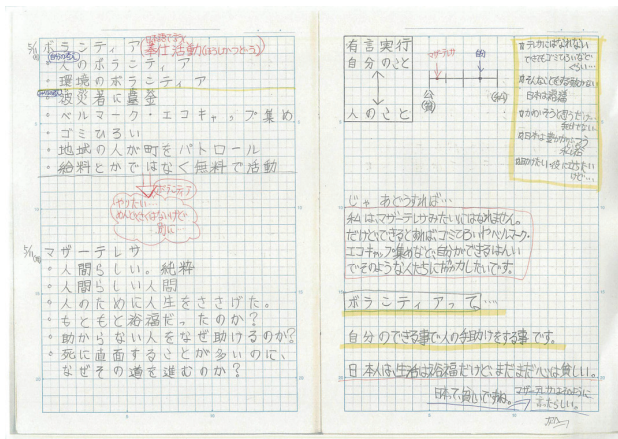


図2 6年勤労・社会奉仕「マザーテレサ」

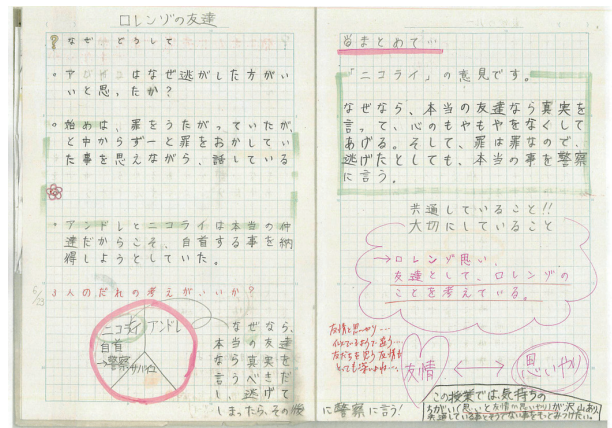


図3 6年友情・信頼「ロレンゾの友だち」

＜昨年度の実践＞

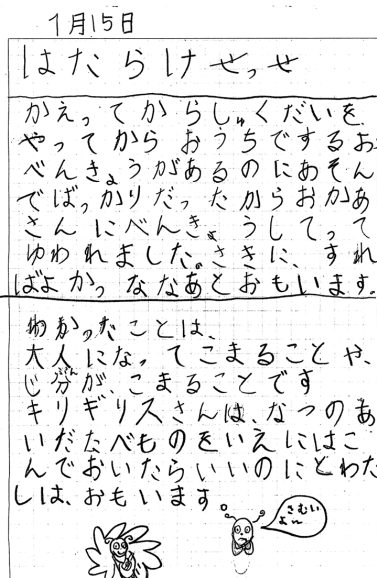


図4 1年勤勉・努力「はたらけせせ」

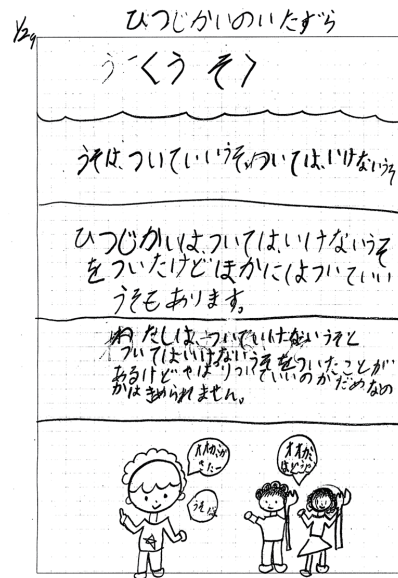


図5 1年正直・誠実「ひつじかいのいたずら」

Ⅳ 正直・誠実「手品師」の授業について

- (1) 日時 平成 27 年 6 月 27 日 (土) (10:00 ～ 10:45)
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属小学校 6 年 1 組
- (3) 本時の目標

○手品師の行動や決断について客観的に話し合ったり、手品師が大切にしているものについて話し合ったりすることを通して、誠実に、明るい心で楽しく生活しようとする考えを深める。

(4) 指導意図

本実践では、手品師の行動や決断について客観的な視点で話し合い、手品師が大切にしているものは何かということについて考えることで誠実に明るく楽しく生活することのよさを考え、道徳的価値の自覚を深めていきたいと考えた。

資料は、前日のフロンティアタイム（学年・学級の裁量時間）に読み、気になったことや考えてみたいこと、疑問に思ったことなどを道徳ノートに記入しておく。それは、本時において話し合いの時間を十分に確保するためであったり、また、資料を読んでから少し時間を置くことで、授業までに個々の中での思いを膨らませることができたりするのではないかと考えるからである。**〔資料との対話・自己との対話〕**

また、資料への導入、価値への導入といった「導入」をあえて行わず、事前に道徳ノートに書いた、気になったことや考えてみたいこと、疑問に思ったことを出し合い、学習問題を児童とともに作った。そうすることで、「考えてみたい」という気持ちをもって主体的に授業と向かい合えるようにした。**〔自己との対話〕** **〔道徳におけるアクティブ・ラーニング〕**

学習問題には、「手品師に共感できるのかできないのか」、「自分だったらどうするのか」、「手品師の行いはいいのか悪いのか」、「手品師の行動や決断に納得できるのかできないのか」といったものが挙がると予想した。手品師の気持ちや行動について場面を追って考えるのではなく、手品師の行動や決断について客観的に考えることに焦点化し、＜個人－グループ全体＞といった学習形態を通して、客観的な立場で多角的・多面的に考え、交流することで、多様な道徳的な価値観にふれあい、他者の異なる考え、同じ考えに出会ったときには、受容的な態度で考えが聴けるようにし、考えが深められるようにした。**〔自己との対話・他者との対話〕**

さらに、それまでの話し合いの結果をもとに、手品師が大切にしているものについて考えた。これまで話し合ってきた「共感できる・共感できない」といったことを、二項対立の構図としてとらえるのではなく、二項対立の構図を超えて、誠実というテーマに迫れるようにした。

児童からは、手品師が大切にしているものは「思いやり」や「約束」などが挙がると考えられる。しかし、「思いやり」や「約束」を大切にするためには、「思いやり」や「約束」といった相手に対してのことにとどまらず、自分自身の内面の誠実さについて気づくことができるように、「心残りはなかったのか?」、「我慢したのか?」、「自分自身にうそをついたのか?」など、問い返しをする中で誠実について考えられるようにした。**〔自己との対話・他者との対話〕**

最後に、本実践を通して書いてきた道徳ノートに考えたことをまとめることで自己を整理し、誠実についての道徳的価値の理解が深められたことが実感できるようにした。**〔自己との対話〕**

(5) 学習過程

主な学習活動・内容	指導上の留意点
<p>1 資料「手品師」を読んで感想を出し合い、学習問題を設定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自由に感想を語らせながら資料から気になったことや考えてみたいこと、疑問に思ったことなどを取り上げ、話し合いの方向性を決め、児童と共に学習問題を設定することができるようにする。 資料は事前提示とし、感想を書く時間を確保しておく。 (資料との対話・自己との対話)
<p>2 学習問題から、手品師の行動や決断について考える。</p> <p>◎手品師の行動や決断に共感できるのか？できないのか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「手品師の行動や決断に共感できるのか、共感できないのか」といった学習問題について、＜個人－グループ全体＞という学習形態を通して、友だちの考えの様々な理由を聞くことにより、客観的な視点から手品師について深く考えられるようにする。 友だちの考えを肯定的にとらえ、互いの考えの共通点や「でも・・・」の部分話し合えるようにする。 (自己との対話・他者との対話)
<p>3 手品師の行動や決断から手品師が大切にしているものについて話し合う。</p> <p>◎手品師の行動や決断から考えて、手品師が大切にしているものは何だろう？</p>	<ul style="list-style-type: none"> 手品師に共感できる、共感できないにとどまらず、手品師が大切にしていることやテーマを考えることで道徳的価値の深まりを促す。 「約束」や「思いやり」といった相手に対してのことにとどまらず、自分自身の内面の誠実さについて気づくことができるように、「心残りはなかったのか？」、「我慢したのか？」、「自分自身にうそをついたのか？」など、問い返しをする。 発言を「自分自身のこと」、「相手に対すること」に整理し、自分自身に誠実であることの上に相手への思いやりがあることがとらえられるようにする。 (自己との対話・他者との対話)
<p>4 本時の学習を通して考えたことを道徳ノートに書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を通して考えたことを書く活動を設定し、道徳的価値に対する自分の思いの変容や道徳的価値の深まり、日常の自分を見つめることができるようにする。 (自己との対話)

V 授業実践からの成果と課題

【対話に関わる工夫】

- ①自己との対話（資料・道徳的事象との出会い・資料の事前提示・事前に感想を記述）について
感想を書く観点として3つの観点を設定した。1つ目は疑問「なぜ？」である。2つ目は一般的

にも SNS で使われている「いいね」である。3つ目は、「わかるわかる・なっとく」である。この3つの観点で感想を書くことは、資料を様々な視点から読むことができ、客観的にも、共感的にも資料についてとらえることができるとともに、そこから学習問題を設定し、主体的な学びにつながるのではないかと考えている。感想の段階で、個人レベルで多様な考えがあがっている。

客観的な視点で考えている児童や、もし自分だったらという視点で考えている児童、本時の道徳的価値に迫る感想を書いている児童が多くみられた。

また、今回の実践は資料の事前提示を行った。前日のフロンティアタイム（学年裁量時間）に感想を書くことにより、本時において話し合いの時間を多く確保すること、また、高学年になると、資料に書かれている文章が長く、理解するのに時間がかかるので、資料に書かれていることを理解する時間がとれること、さらに、翌日に授業を行うことで自分の考えを深めることができるといった利点があるではないかと考える。以上のように「自己との対話」を行うことで、道徳的価値についての学びを深めることができる。

ここで一番大切なことは、児童が考えてみたいな、迷うなという課題を設定することである。これまでの道徳の授業に多く見られたように、教師がレールを敷いてねらいに向かっていく授業ではなく、児童の疑問から課題を設定するということである。

本時の場合、図6に示したとおり、初発の感想の中から一番多かったのが「手品師はなぜ大劇場を選んだのか？」という本時の道徳的価値に直接迫る疑問であった。さらに、「大切な約束とは何か？」という資料をきっかけに約束について考えるという深い疑問も出た。一方で、「腕がいいのになぜ売れないのか」といったような、物語の内容に関する、道徳的価値とはあまり関係がない疑問も出た。



図6 初発の感想（左） 学習問題（右）

全体で学習問題を設定するにあたっては、「何を考えてみたい？」と投げかけた。「自分だったら大劇場と男の子どちらを選ぶか」や「夢と約束どちらが大事か」が出された。挙手により、「自分だったら大劇場と男の子どちらを選ぶか」になった。しかし「夢か約束か」といった資料から離れた大きなテーマで話し合うことも可能であるのではないかと考える。

いずれにせよ、児童が主体的に考えてみたいことを学習問題として設定すること、つまり、「道徳におけるアクティブ・ラーニング」のひとつとしてとても有効であると考えられる。

学習問題が決まると、次には学習問題について自分の考えをもつことが大切である。自分の考え

を整理するために道徳ノートにどちらかとその理由を記入した（自己との対話）。この「自分の考えをもつこと」つまり「自己との対話」はこれまで生きてきた中で培ってきた自分の道徳的価値観といえる。自分の考えをもつことは、多様な考えにふれる「他者との対話」に向けて大きな話し合いの種となるうえで大切である。

②他者との対話（ホワイトボードの利用・グループでの対話・全体での対話）について

道徳の授業におけるグループ活動についての是非が問われることがあるが、ペアやグループといった学び合いの中で道徳的価値について考えていくことこそ、これから求められていくことなのではないかと考える。

本時は、ホワイトボードとネームプレートを使い、考えの交流（他者との対話）を行った。

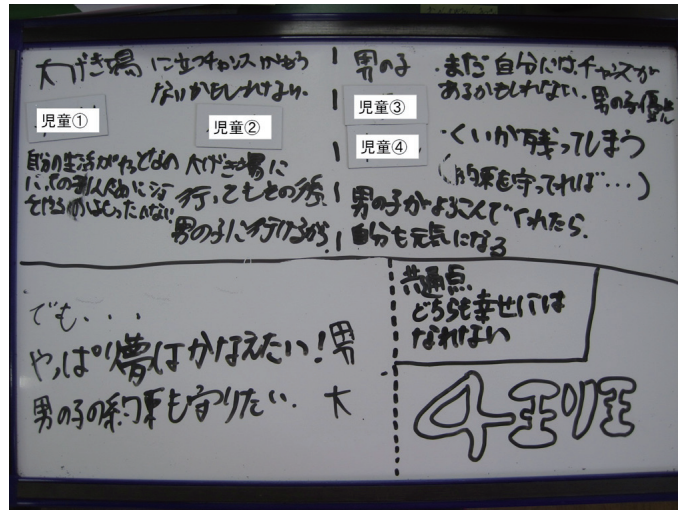


図7 大劇場と男の子が2人のグループ

図7に示したグループでは、自分の考えを出し合ったあと、「やっぱり夢は叶えたい」「男の子との約束を守りたい」といったそれぞれの「でも」の部分と、「どちらも幸せにはならない」という共通点を話し合っている。

途中、ネームプレートを動かしながら、他者の考えを聞く中で自分の考えを見つめ直すことができています。

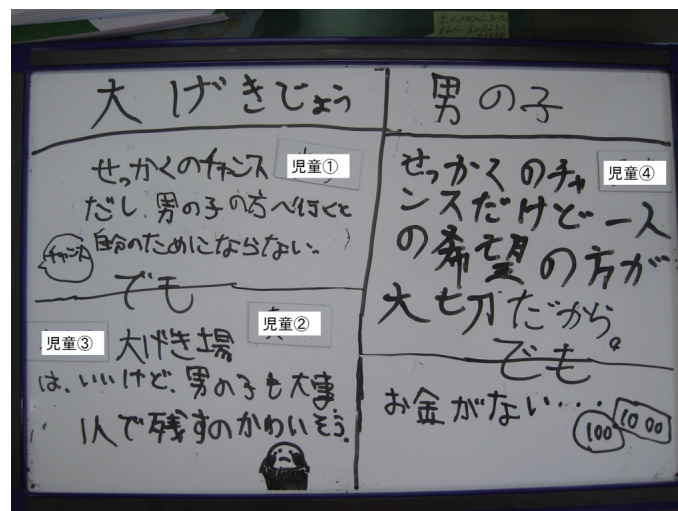
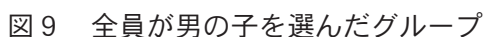
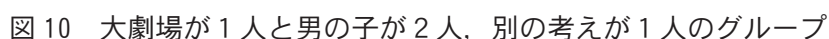


図8 大劇場3人と男の子が1人のグループ



しかし、ひとつの考えに固執するのではなく、反対の大劇場の立場の考え、「でも」の部分、共通点について話し合うことで多角的・多面的に考えることができています。



– 131 –

グループ活動において大切なことは、自分と異なる考えに対し、受容的な態度で聞けるかどうかである。自分と異なる考えに出会ったときに、排他的になってしまうことはよくあることであるが、グループでの対話を繰り返すことによって「あなたはそう考えるんだね、でも自分はこう考えるんだよ」や「なるほど、そういう視点からの考えもあるんだ」といった自分ひとりでは気づかなかった視点から考えることもできる。また、他者の考えを共感的に受け入れることは自分の考えを深めるためにも有効であるし、社会性を身につけるためにも大切なことであると考ええる。

さらに、全体で行う「他者との対話」として、手品師について話し合うだけでなく、手品師の一連の行動から「手品師が大切にしていることは何か？」という発問を投げかけた。児童には「手品師が大切にしているものは○○○だ！」という形で書くように指示をした。

これは、これまで考え、話し合ってきた内容を本時のねらいである「誠実」という道徳的価値に迫るための大きな「テーマに迫る発問」である。

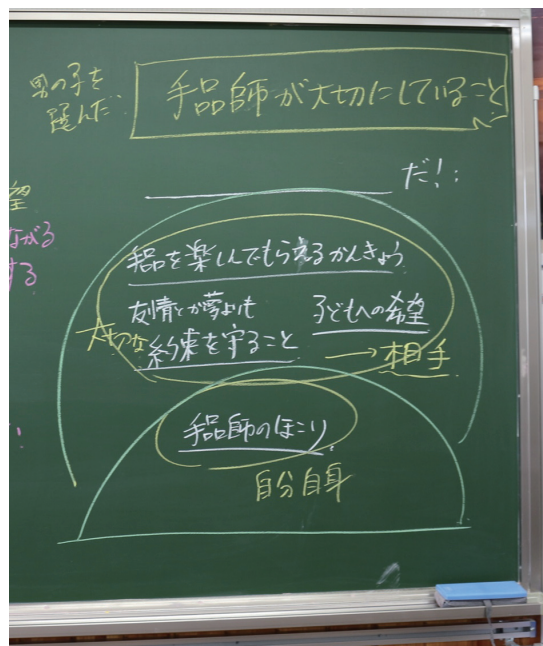


図 11 手品師が大切にしていることは 板書

図 11 に示したとおり、児童からは以下のような考えが出た。

- 友情とか夢よりも約束を守ること
- 男の子への希望
- 手品を楽しんでもらえる環境
- 手品師としての誇り

本時のねらいとする道徳的価値は「誠実」である。「誠実」という言葉が直接出てこなくても、児童が出した考えはすべて「誠実」に結びついているものである。また、「友情とか夢よりも約束を守ること」や「男の子への希望」は他の人とのかかわりの中からの視点の考えであり、「手品を楽しんでもらえる環境」は社会的な視点からの考えであり、「手品師としての誇り」は自分自身の内面からの考えである。

このように、道徳的価値を、「他者との対話」をとおして自分とのかかわり、他者とのかかわり、社会とのかかわりという視点から考えることは、新学習指導要領で求められている力である多角的・多面的に考えることにつながっているのではないかと考える。

③自己との対話（道徳ノートにまとめる・考えの更新，再構築）について

「他者との対話」によって得られた考えを自分なりに更新，再構築するために大切なのが道徳ノートである。図12で示した板書，「対話」をもとに，1時間を通して，初発の感想，学習問題に対しての自分の考え，他者の考え，そして学習感想を書いている。ワークシートにもよい点があるが，道徳ノートは自分で「デザイン」することで道徳的価値の理解につながると考えている。

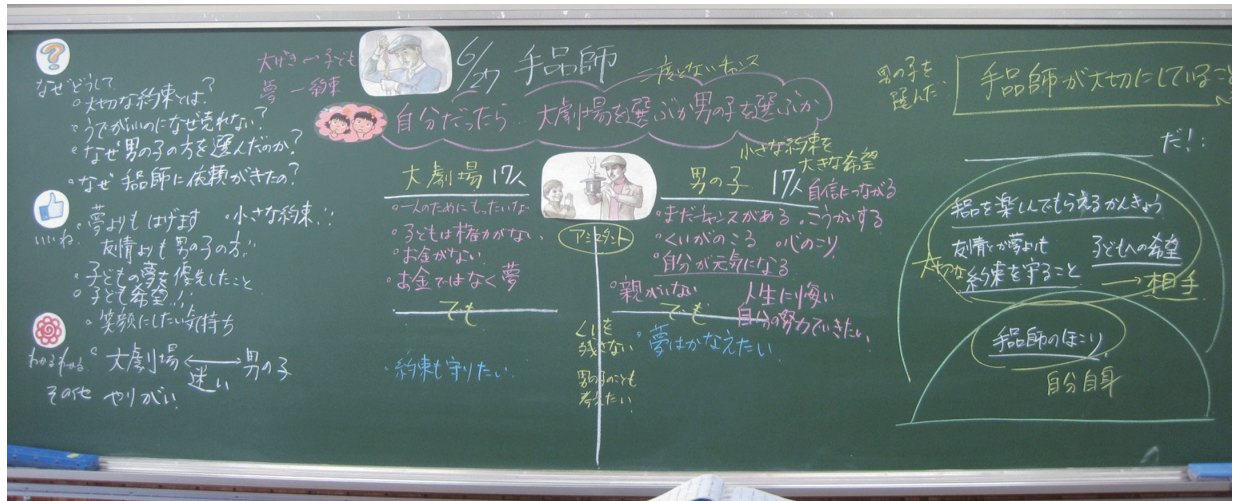


図12 本時の板書

【道徳ノートに関わる工夫】

授業中に書かれた道徳ノートの記述をもとに，分析を行う。

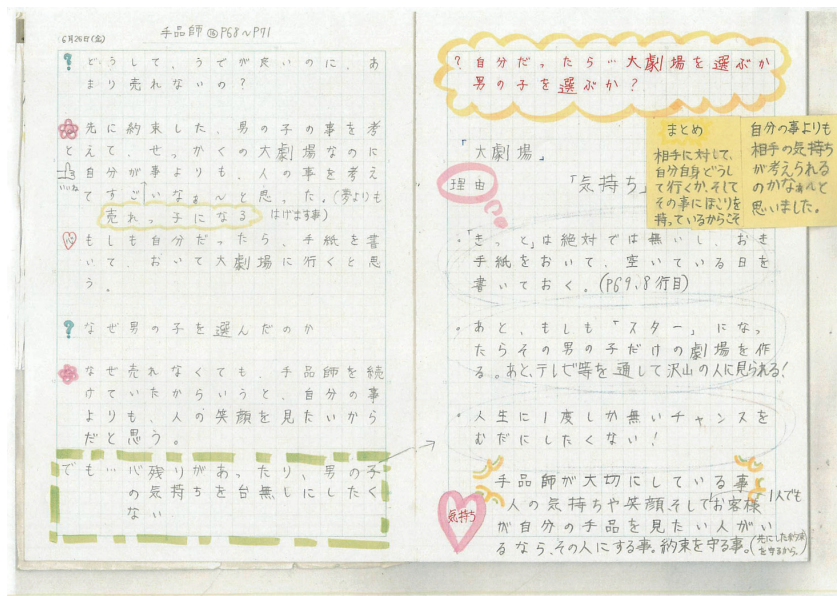


図13 児童Aの記述内容

図13に示した児童Aは，自分だったら大劇場に行くとしている。一度しかないチャンスが無駄にしたいはないという一方で，相手に対して自分自身どうしていかを考えたときに，手品師として誇りをもっているからこそ自分のことより相手のことを考えられるとしている。

多様な考えを聞き，対話を通して考えることにより，手品師の立場から多角的に考えることができています。

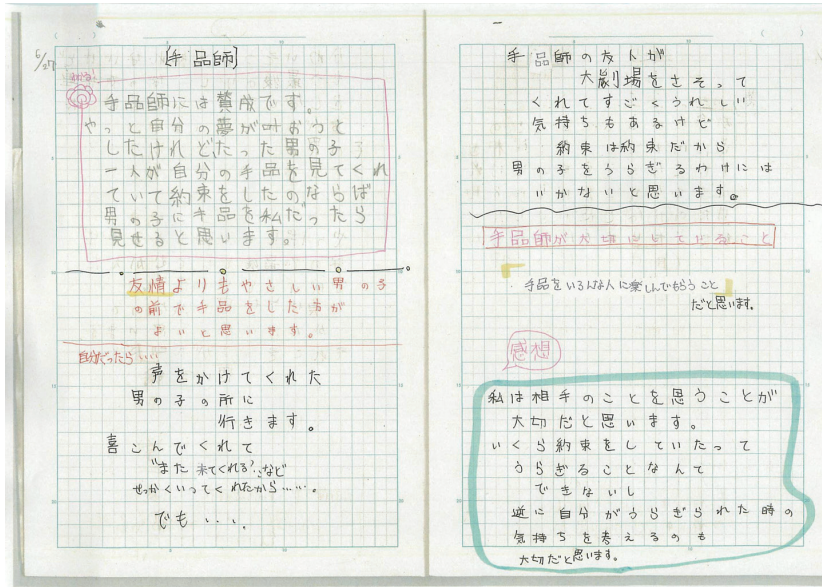


図 14 児童 B の記述内容

図 14 示した児童 B は自分だったら男の子のところに行くとしている。約束は約束だから裏切るわけにはいかないという考えをもち、手品師が大切にしていることは手品をいろいろな人に楽しんでもらいたいという手品師という仕事に対しての誠実さを大切にしている。

約束をした相手のことを考え、自分が裏切られた時の気持ちを考えることで、自分に誠実であることの大切さに迫っている。

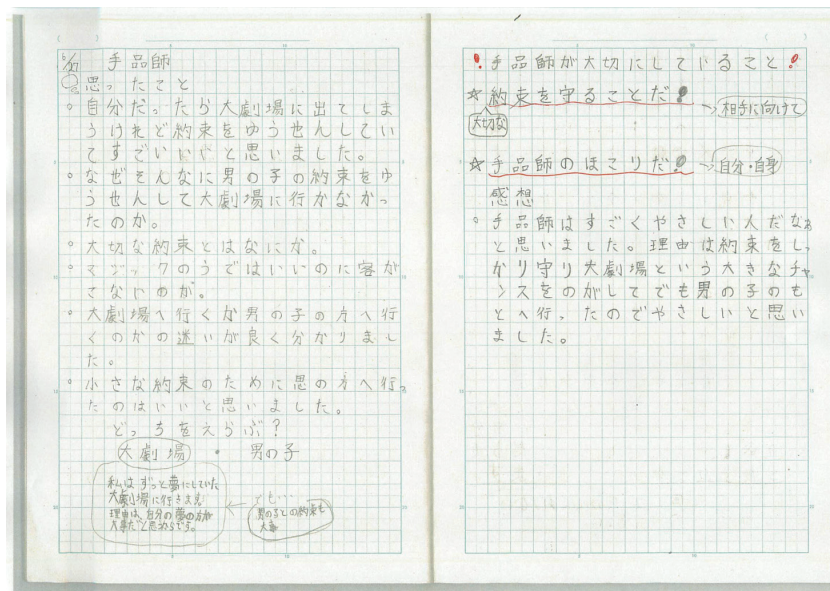


図 15 児童 C の記述内容

図 15 に示した児童 C は、自分だったら大劇場に行くとしている。自分の夢の方が大事であると考えている反面、男の子との約束も大事だとも考えている。

児童 C は、手品師が大切にしているものについて「約束を守る」という相手に対しての考えと、「手品師の誇り」という自分自身という 2 つの視点から考えている。手品師の立場に立って、多角的に考え、自分自身に誠実、相手に誠実という 2 つの誠実について迫っている。

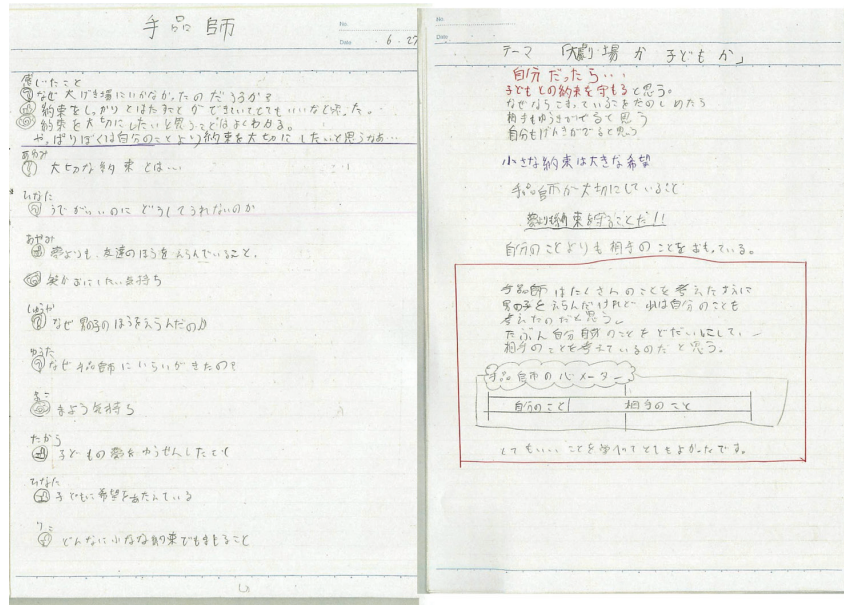


図 16 児童Dの記述内容

図 16 示した児童 D は男の子のところに行くとしている。児童 D は、道徳ノートに友だちの意見を書いている。対話を行う上で、他者の考えをメモすることはとても大切なことである。

また、まとめとして、手品師の心の中をメーターで表している。白か黒か、善いか悪いかではなく、人間の微妙な心の動きや心の中に迫っている。

図 13～図 16 まで 4 名の児童の道徳ノートを示した。児童がそれぞれ枠にとらわれずまとめている。

道徳の授業において、ワークシートを用いることにも有効な点は多くある。しかし、ノートと用いて、図や表、イラスト、吹き出しを用いるといったような自分だけのノートづくり、自分なりのノートの「デザイン」を行い、その時間において多様な考えにふれることで、自己を見つめ直すことができる。

そして、道徳ノートを毎時間積み重ねていくことで、学びの履歴が残り、時間を置いて、振り返ったときに自分の成長を実感でき、長期的な視点で自分を見つめ直す手だてになるのではないかと考える。

それと同時に、児童の思考の過程が明らかになり、新しい「道徳科」として、評価につなげていくことができるのではないかと考える。

VI おわりに

本研究を通して、「自己－他者－自己」という対話を授業の中心に据えた授業構成や、考えをまとめ、整理し、振り返ることのできる道徳ノートの有効性について研究を深めることができた。

教科化時代の「考え、議論する」道徳授業とはどういうものか、そして平成 30 年度からの本格実施の「道徳科」の授業の在り方、評価の在り方について引き続き研究を深めて行くとともに、多様な価値観があふれる現代社会に対応しうる道徳性を育むために、「アクティブ・ラーニング」といった、児童が主体的に悩み、迷い、考えてみたいという気持ちをもてるような、道徳授業の在り方についての研究を進めていきたい。

VII 謝辞

本研究を進めるうえで、多くの方々にご指導，ご助言をいただきました。

山梨県教育委員会義務教育課 指導主事 田中一弘先生

甲府市立池田小学校 校長 蘆原桂先生

山梨大学教育人間科学部 藤田博康教授

甲府市立国母小学校 三井正彦先生

大月市立大月東小学校 佐藤淳一先生

北杜市立明野小学校 小尾綾先生

山梨大学教育人間科学部附属小学校 副校長 中國昭彦先生

お忙しい中でのご協力に心より感謝申し上げます。

＜参考文献＞

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 道徳編」2008，東洋館出版社
- 2) 文部科学省「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」2009
- 3) 中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」2014
- 4) 文部科学大臣「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」2014
- 5) 押谷由夫・柳沼良太・編著 貝塚茂樹・西野真由美・関根明伸・松本美奈 著
「道徳の時代が来た ～道徳教科への提言～」2013，教育出版
- 6) 赤堀博行「道徳授業で大切なこと」2013，東洋館出版
- 7) 加藤宣行 編著 坂本哲彦 著「小学校 道徳 授業の基礎技術」2012，東洋館出版
- 8) 坂本哲彦「道徳授業のユニバーサルデザイン」2014，東洋館出版